



公共図書館に電子書籍を配信する OverDrive 社

時 象 一

1. はじめに

欧米で公共図書館に電子書籍を配信している会社には OverDrive, Netlibrary, ebrary, Ingram Digital, Follett, EBL (以上米国), Public Library Online (英国) などがあるが、中でも OverDrive 社のシェアは大きい。2011年11月にオハイオ州クリーブランドにある OverDrive 社を訪問したので、その報告をしたい。

2. OverDrive 社のサービス

同社は現在米国を中心として16か国15,000図書館に電子書籍とオーディオ書籍を提供している。現在扱っているコンテンツは電子書籍、

オーディオ、音楽、ビデオ、その他のデジタルコンテンツ (ゲームなど) である。利用者には図書館だけでなく、Books-a-Million (BAM), ハーレクイン, Read without Paper などの電子書籍の小売店もある。同社ではウェア・ハウスと呼ばれるデータベースにすべてのコンテンツを格納し、これをこれらの顧客のニーズに合わせて提供している。

電子書籍を提供している出版社には、ハチェット、ハーバーコリンズ、ペンギン、ランダムハウス、マクグロウヒル、ハーレクイン、マーベル (コミック)、ディズニーなどがある。提供コンテンツ数は電子書籍・オーディオ書籍合わせて650,000タイトル

とされている。電子書籍だけのタイトル数は公表されていないが、およそ200,000タイトルと思われる。

米国ではニューヨーク公共図書館、シカゴ公共図書館、ボストン公共図書館など上位85の図書館システムの95%に導入されている。たとえばオハイオ州では支部図書館も含め625図書館が利用している。

海外ではロンドン図書館コンソーシアム、シンガポール国立図書館、台北市立図書館など、公共図書館以外では米国議会図書館、米国陸軍や海軍の図書館、マイクロソフト図書館、全米不動産協会図書館などでも利用されている。また学校図書館や大学図書館でも使われている。利用図書館は毎月100~200館増加しているとのことであった。

同社のエントランス・ホールには現在の貸出数を示すモニターが掲示されており (写真1), 総貸出数6190万件と表示されていた。右下が今月 (2011/11/11現在) の貸出数なので、1



図1. ボストン公共図書館の電子書籍ページ (OverDriveのロゴは最近表示しなくなった)



図2. 台北市立図書館のOverDrive電子書籍画面



写真1. OverDrive社のホールにある貸出数を示すモニター（筆者撮影）

か月で約350万件の貸出がある計算になる。貸出数は2011年に383%増加したとのことである。

同社の利用者アンケート（2011年5～6月）によると、利用者の77%が女性で、年齢では40～59歳が47%を占めていた。所得水準は78%が年収60,000ドル（450万円）以上、教育水準は78%が2～4年の大学卒業以上であった。利用者の30%はふだん図書館に出かけることはないが、電子書籍はいつも使っているとのことであった。このように、電子書籍は図書館利用者を広げるのに役立っていることがわかる。

3. 電子書籍の利用

OverDriveではEPUBとPDFの電子書籍を提供している。これらはPC/Macで閲覧できるほか、電子書籍用リーダー（Sony Reader, Nook, Kindle等）、モバイル端末（iPhone/iPad, Android, BlacBerry）でアクセスできる。Kindleなどの電子書籍リーダーの場合は直接ダウンロードできるが、PC/Mac, iPhone/iPad, Androidなどの場合はOverDrive Media ConsoleをインストールしてEPUBを利用する。PDFを読む場合はAdobe Digital Editionsを使う（EPUB

も読める）。日本の公立図書館で利用されている電子書籍システムのほとんどは、PCでしか読めないことを考えると、多彩なデバイスで読めることはうらやましい。

本を借りるには、自分が登録している図書館のOverDriveのサイトに出かけ、本を選択してダウンロードする。貸出は同時に本1冊

あたり1名に制限されており、また返却期限を過ぎると読めなくなる。これは日本でも同じであるが、違うのは1回借り出すと、何回でも複数のデバイスに移動できるので、どんな場所でも読むことができる。

電子書籍には出版社のDRMがかかっているため、印刷やコピーはできないが、最近障害者のための自動読み上げに対応するため、DRMフリーの電子書籍も登場している。

また、さまざまな利用統計はリアルタイムで取ることができるので、図書館にとって大変便利である。

出版社から受け入れたデータはOverDriveの配信形式に変換する。その際、データのチェックも行って適宜修正する。マーク形式の書誌データ（月25,000件）も受け入れ、これを補足してOCLCにも提供している。これらを使って図書推薦（リコメンド）サービスも行っている。

OverDriveはいつも最良の質のコンテンツを提供するようにしているとのことである。たとえばビデオなどはファイル変換して提供しているが、そのソースは半年はオフィスに置いておき、利用者から苦情が出たらすぐに作り直せるようにしているそうだ。

4. OverDrive社について

創立者社長でCEOのポターシュ氏は1975年にオハイオ州コロンバスにあるオハイオ州立大学を出たあと、クリーブランドで弁護士事務所に勤務していた。そのころ法律文書の自動作成ができないかと、プログラムを作らせたりしていたが、そのうち法律関係の出版社の電子化を手伝うようになり、本格的に電子化ビジネスを始めた。最初はフロッピー・ディスク、その後CD-ROMの電子書籍を作成した。1986年にOverDrive社を創立した。その後弁護士事務所の仕事はやめたが、現在も判事として地区の裁判（day trial）をときどき担当している。同社はEPUBを定めた国際電子出版フォーラム（International Digital Publishing Forum: IDPF）の創立時からの会員であり、ポターシュ氏は一時会長も務めた。

OverDrive社は現在のオフィスに約150人のスタッフがいます。業務としては、図書館等利用者との契約、出版社との契約、図書館サポート、受入データのチェック、書誌事項のチェック、ソフトウェアの開発・メンテナンス、などである。ソフトウェアの開発にはプラットフォームやダッシュボードの開発などがある。

地元で成長してきた会社であり、職場は開放的で、スタッフも大変フレンドリーであった（写真2）。社長の趣味で、会議室などにはスター・ウォーズのキャラクターの名前がつけられていた（写真3）。現在同社が入っているのはクリーブランド市郊外のオフィス団地の一角で、急成長をとげた会社らしく、いかにも狭い感じであった。2012年の夏、近所に新社屋（写真1の右上に写っている建



写真2. ある社員の席はキティちゃんと猫の写真だらけ

物)が完成するので、そちらに移転する予定である。

5. おわりに

ポターシュ氏は大変精力的で、常に出張で飛び回っている様子であり、今回面会できたのは幸運であった。米国の図書館向け電子書籍は今年も急成長しており、OverDrive社の事業も軌道に乗っている様子であった。わが国でもスマートフォンやタブレットが普及しはじめており、図書館が本格的に電子書籍を提供することができれば、多くの市民を図書館に呼び寄せることができるのではないかと感じた。

(ときぎね そういち:愛知大学文学部)
[NDC9:016.253 BSH:1.電子書籍
2.図書館(公共)-アメリカ合衆国]



写真3. 会議室にはスター・ウォーズのキャラクターの名前がついている。これはダース・ベーダーの部屋で、壁にその写真が貼ってある



写真4. ポターシュ氏(中央)と契約担当のアッシュ氏(右),左は筆者

「おはなし」を聞く子どもたちから 教えられたこと

山本宣親

私は図書館を退職して満8年が過ぎようとしている。仕事からは離れたが、「おはなし」との縁は続いている。「おなしじーじ」として園児や生徒にストーリーテリングを語っているからである。

最近の活動の中から聞き手の子どもたちから教えられたことを報告したい。

引き継がれる聞く力

富士市立N保育園へは年に3回出向き、既に満10年となる。先日のことであった。年長と年中一緒に60人を前に「上のじいさま下のじいさま」(むかしむかし・童心社)を語っていた時だった。既に他の「おはなし」を二つ語って10分ほど経過していた。子どもたちの聞き入る顔つきや態度から(よし、長くても大丈夫そうだ

な)と判断し、20分ほど要するこの「上のじいさま…」を語ろうと考えたからである。

通常この年代の子どもたちは15分が限界である。同園の子どもたちも当初は同様であったが、何年か続けているうちに30分間ほどが「お楽しみのおはなし会」として定着してきた。それも一つの「おはなし」だけで20分の長編を聞く力をつけてきたのだ。

毎年子どもたちは卒園し顔ぶれが交代するというのに、これはどういふことかと不思議な気がしたが、伝統の力は後輩に引き継がれているようだ。それに職員の意識的な働きかけも効果を高めているに違いない。

教室中にこうしたよい雰囲気は充滿している感じで、私は子どもたちの顔つきが次第に輝いていくように